

特 67

414



香朝樓笠平

○役人替名

○曾我五郎時致
 ○富樫左衛門源七
 ○源太五郎源七
 ○鬼王新左衛門
 ○近江小藤太成家
 ○龜井の六郎
 ○白子屋の後家おつね
 ○宇佐美の三郎
 ○仁田四郎忠常
 ○番卒
 ○車力善八
 ○二の宮太郎
 ○曾我下人團三
 ○片岡八郎
 ○梶原平二景高
 ○大藤内成景
 ○軍卒
 ○浦範頼入道源雄
 ○新開の荒次郎
 ○京の小次郎
 ○伊勢の三郎
 ○島山の室銀杏
 ○源七女房おなり
 ○二の宮室片貝
 ○團三妹十六夜

市川左團次
 市川壽美藏
 片岡市藏
 市川新藏
 市川荒次郎
 市川猿之助
 市川升若
 市川女寅

○海老名の太郎
 ○八幡三郎行氏
 ○金かし利兵衛
 ○榛谷の四郎
 ○竹澤官藤二
 ○本田次郎近常
 ○でつち丁太
 ○曾我十郎祐成
 ○髮結入墨新三
 ○太刀持辰若
 ○常陸坊海尊
 ○家主長兵衛
 ○喜瀬川の龜菊
 ○白子屋下女おさく
 ○御所の五郎丸
 ○化粧坂の少將
 ○和田左衛門義盛
 ○白子屋の手代忠七
 ○大磯の虎
 ○判官義經
 ○白子屋の娘おくま
 ○和子の室巴御前
 ○母万江
 ○工藤左衛門祐經
 ○武藏坊辨慶

尾上蟹十郎
 市川左文次
 尾上丑之助
 尾上菊五郎
 市川ぼたん
 尾上松助
 尾上榮三郎
 市川米藏
 尾上菊之助
 中村福助
 坂東秀調
 市川團十郎

○歌舞伎座筋書第十五號

第一番目狂言

○十二時會稽曾我 三幕

○序まく「雀目ヶ谷割すわたしの場」ふたいの道具在体
 笹敷などよろしく爰へ、梶原平二景高(荒次郎)乗物へ乗
 り(供廻り)大せい付そひ出る是と一所に下手より、浦の
 範頼入道源雄(猿の助)坊主かつらにて(供人)二人付て出
 る景高の家來是を見て、浦殿御通りにゐるが御會釋なさ
 れ升るかど伺ふ(荒)こなし有て、世捨坊主の浦の入道何
 のをしやくに及ばふや此まゝト乗物より下す戸をあ
 けさせ横柄に(荒)これは〜入道どのに北の丸へ御出
 仕なるか(猿)のヲ、梶原なりしか其方よも出仕の途中か
 (荒)いかにも今日は御狩場にて當時出頭第一なる工藤左
 衛門祐經と本田の次郎と鹿の射論倍臣づれの本田に何の
 入道どのまで煩はすは無益の事とよろしくけふの鹿論を

さげすむこなし、浦殿の(猿)今日は政子殿れさしづに
 營中の留守を預かる此入道へ出仕の御沙汰その鹿論は後
 しての事(荒)いかにも後刻營中にて御面だんつかまつら
 んト荒次郎、乗物ヤレト供廻り引つれ上手へ行ふとして
 (荒)思入有て乗物を出てそつと敷盛の内へ隠れる爰へ下
 手(壽美藏)曾我の家老鬼王新左衛門にて出て編笠をど
 り落涙の思入(猿)夫にて落るいいたすは何ものなるぞ
 (壽美)ハ、ットあしやくして、某しは曾我の下人鬼王と
 申もの恐れ多くも浦殿には右幕下の御弟にして先年平家
 追討の折には判官殿ともどもに遠き八島へ攻下り平家
 を亡ぼしたまひし御高名ありしにいかなるものが讒言に
 やたちまち御兄弟の御中不和と成り此程御出家とならせ
 たまひしさへ無さんなるも梶原づれが今のふるまひ君の
 御供をさへざる乗打のわがま、無禮夫に付ても私しが主
 人曾我兄弟が父の敵工藤を討取る運命のいつ来るやと身
 につまされ御不運の程恐れながら思へば〜口をし〜ト

よろしく述べ懐の思入(猿の)もよろしく世のありさまを述懐して、イヤ範頼が不運はせひもなし予も聞及ぶ會我兄弟が父河津を討し敵工藤祐つねと知れながらいまは本望とげざる無念左こそと察し入る祐つねが日頃のふるまひ位辯をもつて上へつらひ辯舌をもつて人を説するにつくき奴今度富士の御狩の總奉行と聞く斯る時討ずんば鎌倉の館は用じんきびしく所詮本望ひづかしうらん兄弟が本望は此時を過すべからず不運は同じ會我兄弟孝心にめで今範頼が與ふるものわりと懐中より割符二枚取出し、是が北條、大江が印判せし狩場のわりふこれを所持なす時は御狩の内はいづれでも通行勝手たるべし今其方へ遣はずと是を聞(壽美)よろこび、そりや兄弟へ此割符をたまはるとな御高恩の程かたじけなしと件の割符を受取りよろこぶ思入是をいせんの梶原(荒次郎)敷蔭にて見届け思はず(猿の助)と顔見合せ意味合のこなしと(荒)は下手へは入る(猿の)然らば鬼王とやら(壽美)重ねくの御

高恩(猿の)又の再會ト兩人よろしく有て此道具廻る
○同「營中北の九大廣間の場」ふたい金ぶすま御殿の道具よろしく爰に(大名相中)六人居並び居て(大名)今日は御臺政子さまの御沙汰とあつて昨日狩場にて祐つね殿と畠山の家來本田の次郎との鹿論浦入道との御出座にて御裁許のよしと此筋のせりふ六人よろしくわたつて爰へいせんの梶原(荒次郎)工藤の家來八幡の三郎(蟹十郎)付らひ出で來り(荒)今日な祐經殿と本田の鹿論其射留たる鹿これへト是にて(諸士二人)矢二本たちし鹿の死骸を持って出で真中へ置く(荒)昨日工藤殿射留られしをかたへより是成る大矢をもつて又候射かけしは曲物に相違なきにかたはらより本田の次郎左とくにも某し射留しどの事その大矢には姓名も記さず夫もゑの此鹿論ト此筋せりふ有て爰へいせんの浦入道(猿の)和田の室巴御前(秀調)二の宮の室片貝(女寅)にて出て、鹿論の件よろしく皆へせりふわたつて(猿の)は、業の矢の古事を引くせりふ

よろしく(秀調)の巴もこなし有て敵役(荒、蟹)いひふせらる、件有て是より(荒)其鹿論の本田の矢どわく迄申せと證據なき事夫に付詮議したいは入道殿へ兼て侍所より御わたしありし狩場の割符も御所持はらふな(猿の)エトぎつくり思入(荒)工藤殿を敵とねらふ會我兄弟へ其割符をおかしわたへなされし御心一圓合點がト當付ていふ(猿の)ヤア舌長し景高御渡しありし割符何の他人にかし申さふや(荒)然らば此場を拜見いたさふ(猿)サア夫はト當惑のこなしト心定め(猿の)梶原如きに咎められ割符なき時は(荒)いかんなさる、(猿の)入道は自殺して申わけ(荒)こりや面白いと此の争をひよろしくト(猿)入道申わけに腹切るなら冥途へ供につれるものあり景高覺悟と脇差にてぬき打よ切懸ければ刀の寸短かくして梶原を打そんじ(荒)悔りなし下手へ逃込(猿)は返す刀にて八幡三郎(蟹十)を切倒しわが腹へ刀を突たて自害する(秀、女)皆へ介抱する(猿)割符の事に云わけなく梶

原づれに云ふせられ切腹いたす口をし景高を討渡せしは残念トトよろしく思入爰へ奥より畠山の室いてう(升若)出て、政子さまより御沙汰二の宮殿榎谷殿トよにて二の宮太郎(新藏)榎谷四郎(左文次)出て、ハツト叩へる(升)二の宮殿には是方直に御狩場へ早打此よし君へ言上せられよまつた榎谷殿には浦殿の御介抱なされよトの御沙汰トいふ榎谷(左文)仰せにはふれ共二の宮殿は會我的姉片貝殿の縁あれば途中の猶餘懸念あり何とぞ某し早打の役入道殿の御介抱は二の宮殿へ(新)アイヤ某し會我へ縁あれば途中運刻の御疑念となト思入有て、片貝夫婦の縁は今限り離別いたしたト此件よろしく是を(秀)の巴御前よろしくさばきて、片貝に離別をやりやはり早打は二の宮殿(左文)イヤ拙者がト是を邪魔すると(秀)巴御前、榎谷の首筋を取て動かさせぬ大力の思入(猿の)落入る此件にてよろしく拍子幕
○二幕目「鹿垣内圍三召捕の場」本ふたい富士の狩場内

鹿垣松の立木の道具よろしく爰に工藤の家來足柄鳥太郎
(團七)軍兵(新相中人)立懸り居ていろ／＼兵糧かたの
せりふおかしみ有て行ふとする此時松の木の下より一疋
の鹿半身出す皆／＼是を見て伺りなし(皆／＼)ソレ鹿が
出た逃すな／＼ト是より皆／＼立廻りに成る此鹿垣より
出るト曾我の下人團三郎(新藏)にて鹿の生皮を冠り狩場
へ忍び入りし体(皆／＼)驚き(團七)扱こそ鹿に姿をやつ
し御狩場へ入込曲もの弱めどつて手柄になさんト新藏、
團七、軍兵を相手の立廻りよろしく終に折重なつて團三
(新)を召捕る此もやう道具廻る

○同「假屋馬送りの場」本舞臺うしろ庵りに木瓜の紋付
し白幕を張つめ都て假屋の道具よろしく爰に吉備津の大
藤内成景(荒次郎)宇佐美三郎(市藏)新開荒次郎(穉の助)
海老名小太郎(蟹十郎)竹澤官藤次(左文次)いづれも大名
にて居並び遊女喜瀬川の龜菊(榮三郎)此外(菊三郎、秀
世、佳嗣、筵子、萬の助)五人遊女にて酒宴の体よろし

く(遊女)サア吉備家の客人さま一ツ召上れわたしが御
酌を仕升ふわいな(客)イヤもうのめぬ／＼御酒は充分ヒ
やぞ(市)イヤ不漸の御酒量も似合ぬよわい事／＼ト此
様な酒盛のせりふよろしく渡つて(榮三)夫に付ても工藤
さんはどふなさんしたのでんせう(大名)祐經殿は御狩
の惣奉行さぞ御用繁多ならん斯る酒ももお氣の藥りな
んど龜菊其方まるつて此所へおつれやして来てくりやれ
(榮三)そんならわたしが工藤さんの御迎ひにト立たふと
する此時うしろ工藤左衛門祐經(團十郎)夫へ参らふト
好みの形にて出で来り、これはいづれも御盃重ねて下さ
れしか(大名四人)御用中の所あつて御馳走もはや一同酌
酌いたしたトこなし有て、夫に付只今御在所より火急の
御密使何かお氣遣ひの儀ではムらぬかと是にてこなし有
て(團)いづれもには某しが腹心ゆゑ何も隠さず上るが
兼て一門の河津が悴の曾我兄弟此祐つねを父の敵とねら
い此狩場へ入こんでをるとの事故深く用心いたして兄弟

が胤替りの兄京の小次郎といふ不所存ものを味方にかた
らひ曾我中村の母が許へ入込ませ何かの様子をさぐらせ
し所彼らが母万紅は大病にて今も知れざる生死のさかひ
息ある内に兄弟にわいたいと下人を此所へ使ひに出せし
どの知らせ(大名四人)スリヤ兄弟めは工藤殿を敵とは片
腹いたいと是にて(五人)さん／＼に兄弟をのゝしる事せ
りふわたつて(荒)何にしる最早御用心は及ばぬ事今宵
は龜菊を寐屋の御伽にゆる／＼と御保養こそかんじん
／＼トこんなせりふ有て爰へ近江の小藤太成景(壽美藏)
先にいせんの足柄(だん七)繩に懸りし團三(新藏)を引
出で来り(壽)ハツツ上り成る足柄鹿垣の内にてあやし
い曲もの召捕吟味いたせし處鹿と見せしは曾我の下人團
三とやものト是を聞(團)扱は曾我の下人よな鹿に其身を
やつせしは子細をあらんよも盗賊いたさん爲ではあるま
し有ていに白狀いたせト是にて團三は決心のこなしにて
(新)斯くどらはれし上は何をか包みずさん御狩場へ入込

しはけつして賊をなさん爲にあらず主人祐成時むねには
御狩拜見の爲此所に罷あり然るに中村なる母大病にて今
にもしれぬ御命に生前一目兄弟に逢ひたく何卒其方參つ
てつれ来れよと主人の言付されども御門を通行の割符は
なしせん方なさに鹿の死がいを幸ひに生皮はいで鹿と見
せ忍入りしは斯くの仕合せ此よし兄弟が耳に入りなば最
早そしがしに望みなし御成敗なし下さるべしト覺期の思
入(團)夫にて思ひ合する事あり母が病氣は偽はりなから
んとこなし有て、小藤太團三が其繩といて遣はせ(壽)デ
も此身にはは(團)ハテ解けとサせば(壽)ハツトよぎなく
新藏の繩をとく此時向ふにて、望む所の上り得物十郎殿
はいづれにあるトよばはりながら曾我の五郎(左團次)出
る同じく曾我十郎祐成(菊五郎)狩くらの形弓矢を持って出
て(菊)鹿の通るト申すかつつけや弟(左)のがすまじ兄ヒ
や人ト兩人よろしく舞たいへ来る是にて大名は工藤をか
こひよろしく用心のこなし(菊、左)は工藤に向ひめづら

しや祐経殿十八年が其間かんん辛苦トせりふ有てト
、サア尋常に立合めされトつめよせる是を(新)留て、御
そこつあるな御兄弟わたくしは御一生の大事の御使御母
公さまには一昨日の夕方より俄かに重る御大病どう息
ある内に一目悴にわいたいと其御使ひに此團三サ是より
直中村へお歸なされて下さり升ト是を聞て驚き(菊)何
母じや人が御大病となト兩人顔見合せ悔り思入(團)いか
に會我兄弟老母の大病さずな氣遣ひならん一家の祐つね
人事とは思はじト是より團十郎は、和殿ら何ゆゑ此祐
經を父の仇とは思はるゝぞト是より(團)菊、左(三人、奥
野の狩くらのかへるさに、河津祐道を遠矢にかけし物語よ
ろしく有て、俣野五郎が祐道殿を討たりと人の噂さされ
ば敵は分明ならず何をせうに某しをねらはるゝや(菊、
左)いかよ辨を揮はれても父を討しは貴殿なりと伊豆相
僕にかくれなし隠し立するハ卑怯未れんなりト是を團三
立ふさびつて兩人を留め(新)サ、敵せんき所でない母

様の御大病何事も捨置て中村へお歸りなさらねば日頃の
御孝行も水の泡ト留る是を聞團十郎は、たといふこなし
まて(團)かく理りをせめ申しても父の敵とねらふなら立
合の勝負いたし遣はさんイザ打てよ兄弟トわざと太刀を
取ていふ五郎(左)立掛つて柄へ手を掛るを(新)さびしく
是を留、此内十郎(菊)母の病氣といふは何か計略かとい
ふ思入いろゝ有てト、團三の心をさとり五郎を留(菊)
弟氣がちがふたか母上の御使ひ聞たか(左)イ、ヤ敵に聲
を掛られて向はぬは武士の耻辱ト飛懸る勢ひこれをい
ろゝ(團三)新)なだめ(菊)も一旦爰は見のがせといふ意見
よろしくト、五郎得心して(左)無念なれ共母人の孝道思
へば不運な兄弟が身の上と兩人思入是を龜菊(榮三)中へ
は入りいろゝ、思さめ(榮)兄弟衆も大磯通ひする粹でも
ない腹のたちやうト恥辱を忍んで歸るはト酒にたどへて
せりふよろしく有て、和田酒盛に朝比奈さんの御酒の悪
じひわたしも後ろを見せたわいなト笑ひふ粉らし早く此

場を立て受けといふ(團)ヲ、龜菊がきてんの團元は一家
の會我殿原今日の對面に何をか曳手物とらせんとこなし
有て、幸ひ母の大病とあれば途中のひまどり厭ふべし小
藤太殿につなぎたる外道月毛、婆羅門栗毛乗くら置て兩
人へどらせよ(菊、左)スリヤ母が大病にかけつけん爲名
馬をたまはるとな(團)受給あらば祐つねも大慶と此内小
藤太(善美殿)下手々二疋の馬を(軍兵)に曳せて出る是に
て(菊、左)あつばれ名馬かたじけなしト馬へ乗る(團)他
日面會いたすであらふト此件よろしく幕
○三幕目「會我中村詫住居の場」本ふたいの道具田舎家
閑居の体よろしく爰に庄屋(たい助)奥服や(だん八)米屋
(升藏)三人催促の体是を京の小次郎(猿之助)浪人ものに
ていひわけして居る(猿)何にしる奥には大病人があれば
けん歸つてくりやれ(三人)は、米屋は毎日の飯米、
又とふくやは何に用ふるか蝶千鳥を染た素袍の注文其代
を拂はすけふのあすの云わけも程があるといふを(た

い)兩人を和めてコレゝ二人の乗わしも同じ地代の
滯りを取に來て執成ではないけれど此會我さまは所の
名さへ會我中村今でこそ浪人してゐるが元は此村の草分
御地頭さま殊に御兩人の御子息は親孝行の上に力も勝れ
やがて鎌倉へ召出されて高取に成られやうと成る時は
倍ましに拂ひはして下さるトこんな事いつて執成是にて
兩人も得心して(だん、升)かんじんの庄屋殿が夫程に受
合ふなら出世する迄待ちませうその代り貸は倍増にして
拂つて下されト此件よろしく有て欠乞(三人)は向ふへは
入る跡床の上るりに成り文句よろしく有て奥方大磯の虎
(福助)化粧坂の少將(米藏)遊女にて出て來り(兩人)小次
郎さんそこにかへ(猿)ヲ、二人共よふ看病して下され
た今借金取はやかましくいふ困つた所じや(福)さふして
團三さんは歸り升ぬか(猿)されば二の宮の姉御の所へも
知せてやつたれど狩場へいつて留守中何をいふにも九里
餘りの道とふか歸る迄母の看病願ひぞへ(福、米)そりや

もふ姑御の母上の御大病お世話はきの様にでもしませう
が早ふ御兄弟が御歸りなさんすりやよいがト上る有り有て
小次郎は蚊いふしを仕懸る向ふよりいせんの十郎(菊五
郎)五郎(左圍次)出て来り門口へは入る(福)ヲ、待兼た
十郎さん(菊、左)ヲ、虎少將も来てをりしかシテ母人の
御様子は(福、米)所せん今宵は持つまいと小次郎さんの
御頼みに御介抱して居升たがよく早ふ戻らしやんした
(菊)圓三の迎ひに歸宅せしが御存生と承はり一ツの安堵
ト是れにて奥より母万江(秀)白髪かつらば、病人に
出て(秀)ヲ、兄弟歸りしか(菊、左)ハッ母人北條殿
より賜はつたる奇代の良薬召上つて少しも早く御本復を
といふを(秀)エ、孝行ぶりの其詞葉をのむ差圖は受ぬ母
の病氣といふたはそち二人を呼戻さん為なるぞ(菊、左)
エ、ト思入(秀)母が大病と聞直に歸り来りしは孝行とば
し思ふか今度狩場の御供は兼て父の敵工藤祐つねを討ん
と謀る巧みよなト是方、小次郎より具さに母は聞てをる

五郎は勘當ゆるせし計りまだ初めの氣が直らぬなコレ工
藤殿は當時鎌倉の出頭の大名何百騎といふ供を連れ狩場
へ赴く惣奉行夫が兄弟たつた二人りで何で敵を討れんぞ
工藤方より廻しものでいつ兄弟は討れふかと外へ出れば
母が心配の様ぞ及ばぬのぞみに此母は五臟六腑をしぼ
る苦しみ此苦を見るよりいつそ母を殺してしまやト立腹
のこなし兩人もこなし有て(菊)父の仇を討ふと兄弟命を
すてるも孝行なれど夫よて母の御さげんを損じては尙不
孝命捨てり犬死弟は何んと思ふぞ(左)死はもろ共と誓ひ
し某し兄貴が分別かはるからはと勝手にといふを
(秀)あれあの様なふつてう顔が母の病ひの種成るぞト是
を虎、少將思入有て(米)はんに同じお返事ならやさしふ
いふて上なさんせト此件よろしくト(秀)母は一ツの望
みがある(菊、左)何お望みとは(秀)幸はひ虎のや少將
殿が此家に來合せをるは屈竟まだ郎は年季中なれど兄
弟二人りと二世のかためをト上る有り有て(福、米)粹な母

のさば、いふこなし小次郎(猿)是は母さまのお情けわ
れらも胤こそ變れ一ツ腹なる兄弟が身の上母さまへの介
抱もどかくそはくしてをるは敵を討ふといふ念があれ
ばこそ夫に二人り共妻をもてば心も和らんでコリヤ上分
別(菊、左)母様の仰せゆゑ祝言の事遺存はムリ升ぬ(猿)
スリヤ得心か(秀)幸はひ一兄の居合せは小次郎そちが媒
人役(猿)然らば一寸膳に着を持って参り升ふト奥へは入り
是方膳と肴瓶子など持て出て祝言の件よろしく(秀)此上
は二人り共嫁女をつれて(福)祐成さんかうお出なさんせ
ト米藏も同じく左圍次の手を取り上る有り有て奥へは入る
跡(秀)はんに是で母も安心(猿)イヤ二人共に妻を持てば
是で及ばぬ敵討の念も断ち斯様な目出度事はない媒人は
宵の内ドリヤお暇を母さまも病間へト秀調奥へは入る上
る有り有て爰へ向ふ方笹原九郎(升六)工藤方の廻しもの忍
び出て、小次郎殿(猿)コリヤト邊りへ思入して、シテ圍
三は狩場へ参りしか(升六)圓三は足柄が引とらへ詮議の

折兄弟二人り敵どねらひ既に大事と成る所を母の病氣で
すどくと狩場を出立主人が途中にてくたばらふと荒馬
をたまはりしが思ひの外に其馬を乗りこなし歸つたので
ムリ升ふ(猿)先刻歸りし兄弟扱は其馬を(升)此先の松原
よ二疋の馬のつなぎありしは夫ならん(猿)然らば今夜の
様子祐つね殿へ上る爲幸はひ其馬へ乗り狩場へ(升)イ
ヤ、あまたあせにせよしてあの荒馬がこなされ升ふ
(猿)夫はけんのんな荒馬だ然し兄弟はいよ、敵討の念
を断つたゆゑ此よし工藤殿へ(升)夫承はれば一ツのあ
んど然らば小次郎さま狩場へ御同道(猿)ヲ、同道いたさ
ふト此言合せよろしく兩人下手へ忍びは入る此跡へ万江
(秀)出て跡を見送り、京にてもふけしあの小次郎腹は一
ツの兄弟でも見下げ果たる大悪人ト呆れたる思入にて此
道具廻る
○同奥の間の道具よろしく爰に二ツ紙帳釣つてあり床の
上る有り有ていせんの十郎(菊五郎)五郎(左圍次)直垂をば

し討入の衣せうに成り此紙帳へ書置を書て居る事よろしく有て互ひに書終り是をよみ下し(兩人)母人よ先だつ不孝は冥土にておわびせん弟、兄じや人、時致來やれト兩人勇んで襟より下りる此時紙帳の内方虎(福助)少將(米藏)出て、やお二人りさんが居やしやんせぬト邊りを探す此内兩人は下手垣根へ小がくれする(福、米)コリヤ斯ふしては居られぬ夫との跡をト支度して兄弟が跡を追行んとする爰へいせんの母万江(秀調)出て有合ふ弓を持つて(福、米)を打すへる(福、米)コリヤ何故の御折檻(秀)其譯聞せ升ふト是方、武士の妻に成ては未練者だといふ兼て兄弟が適れ覺悟ト本心をわかす是にて(菊、左)出て、扱は母人も御得心なるか(秀)夫の敵工藤祐經今宵を過ぎば生涯討れぬ最前わざと假屋より病氣といつて呼よせしは兄京の小次郎の人非人敵祐經へ内通此間より看病といひたて此家へ入込る事ない事工藤方へ毎日の知らせ夫故わざと手戻せしも敵に油断をさせんが爲ト是を聞(福、

米)も、母さまにはそらいふお心なりしかト是にて兄弟よろしく裾野へ出立といふ件にて幕
○同大詰「假屋柵門の場」道具よろしく爰に(軍兵相中)四人居て、工藤さまの假屋まで日夜の御酒宴殊々五月雨どはいひながら毎日の大雨かういふ時が油断がならぬト爰へ鎌倉大名(染五郎、左い三)出て、只今東の柵門内よ怪しき二人りの侍入込し様子引とらへ乳明なさんト爰へ本田次郎(左文次)榛澤六郎(菊三郎)出て、其兩人は蒲殿の御内にて割符を所持なすもの詮議には及びやさぬトせりふむたつて(皆々)今一應詮議なさんト此件にて道具廻る
○同工藤假家入口の道具に成り爰に雨戸をわけ遊女龜菊(榮三郎)古歌を詠じて、兄弟の手引をする件有ては爰へ爰へ十郎(菊五郎)五郎(左團次)出て樋竹を切て此雨水をるぼしへうけ兄弟名残の盃をするせりふ渡つて是にて、イデヤ敵の假家へト雨戸をわけは入る此跡へいせんの

(染五郎、左い三、左文次、菊三郎)出て敵役は楯の上に人の足跡があるあやしといふ是と(左文、さく三)兩人にて是は砂ほこりが雨にしめり足の跡が残りしト此間答よろしく有て又道具廻る

の敵右幕下殿を討とらんヲ、さふだト楯先へ上る爰へ御所の五郎丸(米藏)女のかつぎを被り出て(左)の後より抱留兩人力くらべよろしくト(米)とつたト五郎を組留る此件よろしく有て幕

中勸進帳

長唄はやし連中

○同「十番切の場」道具よろしく爰へ(菊、左)出て(相中)の武者十人鎧にて兄弟ト立廻り有て(十人)手を負ふ(左)此内一人どわたり合追込んでは入る跡十郎、父の仇祐經を思ふまゝに討取たればいさぎよく討死なさんト爰へ大藤内(荒次郎)出て、殺される跡へ仁田の四郎(市藏)長刀をもつて出て十郎どわたり合ト十郎の片足を切る是にて(菊)忠常殿はや首討て手柄よせられよ(市)ヤ誤まつて手を負せしかト忠常は助けんといふ義心に(菊)は其心に感じ終に首を討るトいふ件道具廻る

○本むねの能舞臺板羽目鏡板よろしく爰に長唄はやし連中居ならび唄に成り富樫左衛門(左團次)番卒(市藏)荒次郎(猿藏)出て、鎌倉殿御弟判官殿と御中不和にして奥州へ落去の旨夫故此安宅よ新關をかまへ詮議いたせとの嚴命ト爰へ向ふ方辨慶(團十郎)義經(福助)四天王(善美藏、新藏、猿之助、松助)出て、關へ懸るを富樫どがめいろく有て(團)は、大佛再建の山伏といふを(左)然らば勸進帳あらん御見せ候へ(團)長つて候ト有合の巻物を勸進帳にして讀上る夫より山伏問答の件ト(左)是よて疑念は晴しが強力こそ義經公に似たりといふ(團)スリ

○同「御領の假家椽先の場」道具よろしく爰へ五郎(左團次)大わらはにて出て、兄祐成が討れしと聞、最早此身も討死なさんが幸はひ御領の假家なれば大祖父の祐親

ヤ此強力が判官殿にト杖を持って(福)を打主従でないといふ件よろしく(左)は武士の情けと判官殿と知り乍ら關を通しかつ物數多賜はり、先達へ一献まのらせんと番卒酒を持って出て(團)大盃を引受是を、延年の舞に成り首尾よく新關を越へ陸奥へ下向といふ件幕

○第二番目狂言

○梅雨小袖昔八丈

三幕

○序幕「新材木町白子屋の場」爰に後家おつね(壽美藏)手代を相手に帳合をして居る爰へ金貸利兵衛(蟹十郎)出て、先達での用達金を返済してくれといふ(壽美)近來不手廻り故つひ延引夫に付娘のおくまへ聲を取其持參の金子で御返済ト此約束有て(蟹)は下手へは入る爰へ車力善八(市藏)出て聲さまの結納書ト出す爰へ媒人藤兵衛(だん八)結納物を持って目出度といふ下女お菊(榮三郎)出て(市)此おき、は私しが姪女郎に賣られる所をばこちらの御

主人に助けられ御奉公ト此筋よろしく有て(皆)は入る跡へ娘おくま(福助)出る是を(壽美)先年の類焼から終手違ひで此身代が廻り兼夫は夫を氣病に死去よんどころなく借財の爲に又四郎と云ふ聲をどり祝言してくりやれ氣よいるまいが家の爲ト(市)兩人よて頼む思入(福)は外に思ふ男あれば義理づくで得心する(壽)夫で母は安心し升たトは入る跡(福)は(榮三)のお菊へ實は手代の忠七と夫婦約束夫故外から聲を取ては濟ぬといふ(榮三)イエ

〇忠七殿は子飼から大恩受た御主さまの事何で恨みを申すお取なされてもお恨みはムリ升ぬ(福)イエ、そなたは否故思ひ切らふが私しやそなたは思ひ切れぬ故何でも聲はどれぬト是を表にて髪結新三(菊五郎)聞いて居る(さく)悪い人に聞かれたトこなし(菊)内へは入り様子は残らず開升たト是を心切つて一旦おくまを連れて逃る夫でないとお嬢さんは死ぬ見殺しにするは主人へ不忠だト欠

落を勤める件(さく)此口に乗せられ晩にお嬢さんを連れて逃る約束(菊)わしが内は深川富吉町狭い内だがお世話をし升ふト約束して此道具廻る

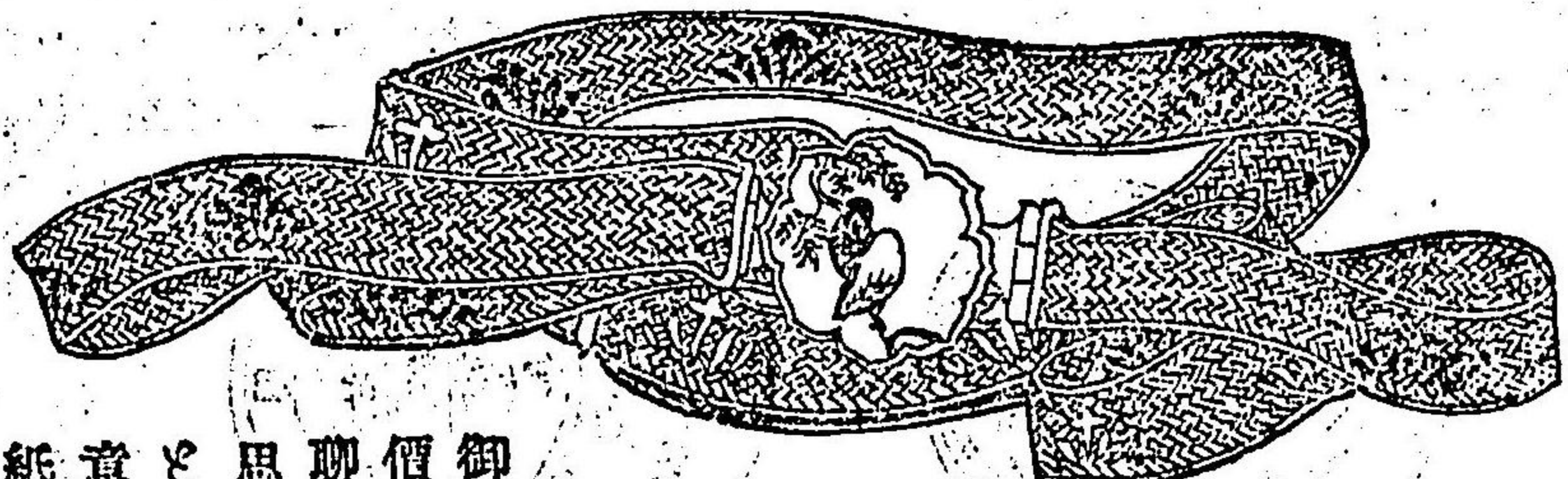
○同「河岸の場」爰へ新三(菊)駕屋を連れ下荆勝奴(菊四郎)手傳ひ終におくま(福)駕へ乗せて忠七(さく)の付て欠落をさせる跡お菊(榮三)もおくまの身の上を案じるこなしにて又此道具廻る

○同「永代橋の場」爰へいせんの新三(菊)忠七(さく)の相合傘で出て來り途中で鼻緒を切俄か邪見な詞遣ひよ成る事ト(さく)今夜からおくまさんと御厄介に成るトいふを(菊)ヤイ、何を吐しやアがるアノお熊は己の色だから己が抱て寐る(さく)の是を聞て悔りなし(さく)のもしや夫では心切は(菊)お熊を連出させる己がこんたんだ(さく)のエ、ト悔り是にて(菊)は(さく)のを打擲しては入る跡(さく)の主人の娘をそのかし是も御爵ト身を投様とする爰へ彌太五郎源七(左團次)通り懸り忠七の

入水を助けるといふ件にてよろしく幕

○二幕目「乗物町源七内の場」爰は源七女房(升若)にて子分銀次(小半次)居てせりふ渡つて源七(左團次)出て、夕邊永代で白子屋の忠七さんを助けたが聞けば内の娘ツ子を連出したを廻りの髪結で入墨のある新三といふ奴よ横取をされたト此筋よろしく爰へ車力善八(市藏)出て來り源七へ娘おくまを新三を取返してくれト頼むを(左)折角の頼みだが先の相手が入墨者誰も知らねへ髪結風情にもし己が云事を聞かねへ時は男の恥夫故是計りは頼まれねへトいふを(市)主人の爲だと餘義なき頼みに(左)困つたものだが仕方ねへト得心するといふ此道具廻る

○同「新三内の場」爰に勝奴(さく)四郎(合長家(幸十郎)居て新三殿は夕邊女を連れて來たさふだネ(さく)四)あれは丁場先の娘ツ子だが親方に遠からくつゝいて居たのを連れて來たのト爰へ向ふ新三(菊五郎)肴屋(音五郎)を連れて鯉を一本買ふトいふ件よろしく爰へ源七(左)善八(市)

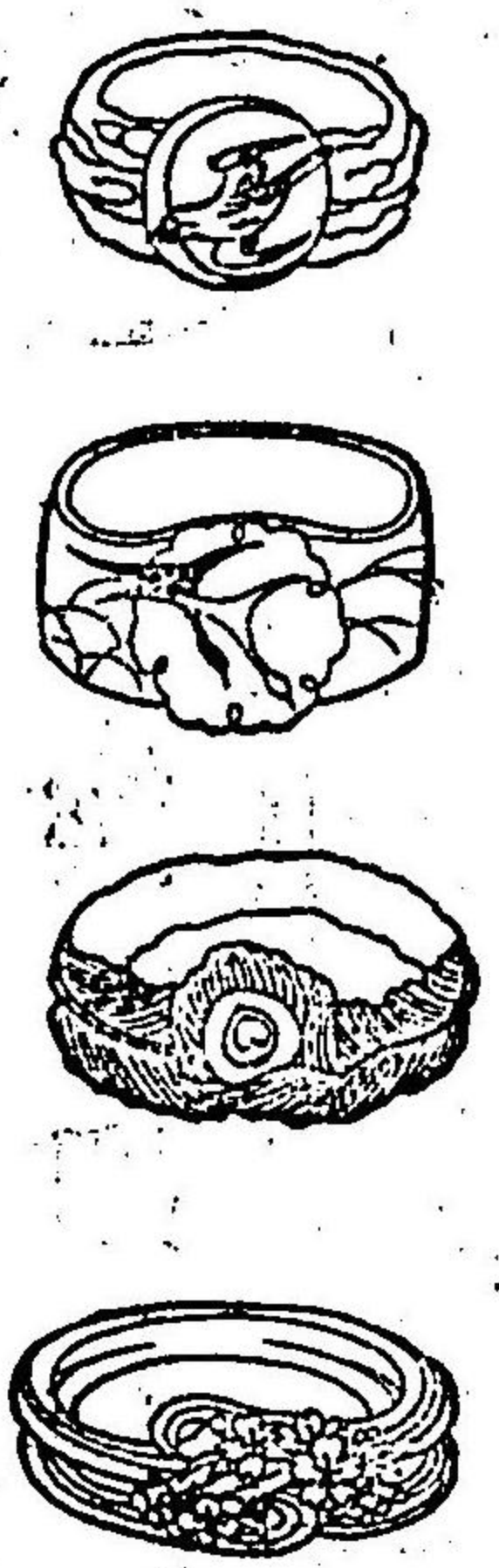


御婦人用御帶止

金又はプラチナに草木花實鳥獸虫
魚古代模倣等の形容を彫刻し或は
種々の寶石寶玉を装嵌したるもの

甲價金四拾圓〇乙三拾五圓〇丙三拾圓〇
丁廿五圓〇戊貳拾圓〇己拾五圓〇庚拾圓〇
辛八圓

右の金ものは何れも名工の手に成
り紐は織物或ハ種々の新形又は古
代の組方は倣ひたる絹打にて其製
作都て壯麗にして優美なり尤も彫
刻の疎密あるひは寶石の大小は依
りて代價にも高下あれは冀くは車
を枉て弊堂に臨み其現品を御覽じ
玉へ但し遠隔の地ならば郵便にて
御注文を下し玉へ代金御送附次第その
價に相當の品を精撰して調進し參らせ
聊かよても御信用に負く事は候はず若
思召に叶はざる時は他品と交換し玉ふ
ども原價を取戻させ玉ふとも御望の隨
意な候ふべし其手續どもは屢々各新聞
紙に廣告したる弊堂店則に詳らかなり



此の外金若しくは白金地へ寶石寶玉を装嵌したるも
の又は種々の彫刻を施したるもの許多有之候間御來
車の上現品御一覽下さるか郵便御注文なれば寶石入
若しくは彫刻附等の區別を指示し代金御送付あれば
其價に相當の品を精撰して調進すべし若し貴意に適
はざる時は購求當日より一週間(本店商品中時計に
限り三十日)以内は(府外は相當の往復日数を加ふ
べし)凡そ其物品は破損毀傷なきに於て何時にて
も需に應じて他の物品と交換し又は原價にて買戻し
聊かたりとも其爲に手数料若しくは割引等を加へざる
べし其他の手續は屢々各新聞紙に廣告する所の弊堂
店則に詳なり

東京市京橋區尾張町二丁目十番地 ●電話番號三百卅三

天賞堂

案内して出て、お熊を返してくれ頼むを(菊)閉入す却
つて(左)が出した小判を叩きつけ散々取辱を興へる件
よろしく(左)は無念を堪へ相手が不足だト指をくわへて
歸るおくま(福)は縛られ猿轡をはめられ戸棚へ入れられ
て居る事(菊)は源七もねへ物だト此件よろしく道具廻る
○同「家主長兵衛内の場」愛へいせんの善八(市)出て長
兵衛(松助)女房(翫太郎)へ長家内の新三郎主人の娘を取
返してくれ頼む(松)中へ一筋縄では行ぬへ奴だがそ
こは家主の威光で取返して遣らんと受合此道具廻る
○又新三の内の道具へ戻り長兵衛(松助)出て是よりお熊
を返してやれといふを(菊)否だといふ(松)否ならよせ元
から入墨者といふ事を承知で置たも己が情け否だといや
ア勾引の廉を召連訴へをするサア一所に來いと威され新
三餘義なく得心する(松)夫じやア白子屋から三十兩手切
を取たから早く娘を返せト是れにて(菊)は戸棚からお熊
(福)を出し是を善八(市)駕へ乗せよるこんで連戻る(菊)

大家さん金を下せへト松助是に構はず以前の鏝を見て、
こいつは氣が悪い片身くれるトねたり三十兩の内十五兩
鏝片身の半分貰ふト此間をかしま有てト、女房(翫太郎)
内へ盜賊がは入つたト知らせに驚くといふ幕
○大切「閻魔堂橋の場」愛に源七(左團次)新三に恥をか
いされ數年來の磨いた男が廢りしと堪忍仕兼つひに新三
(菊五郎)を殺害するといふ立廻りよろしく(捕方)大せい
出て人殺し御用だと源七召捕に成るといふが結局なり

明治廿六年五月四日印刷
全 年五月六日發行

定價金八錢

編輯兼 鈴 木 孝 平
發行所 東京日本橋區本町三丁目十四番地
印刷者 井 上 吉 次 郎
印刷所 東京築地活版製造所
東京京橋區尾張町二丁目十番地

六廿百話電 屋目廣 町疊橋京 扱取手一告廣内場劇



鹿 細 麩 本 造 製 手袋
 染 工 市 地 京 東 橋 本 日
 革 革 番 町 研 橋 日
 種 各 屋 勢 伊 本 類
八 卵 谷 熊 種 各

袋物販賣廣告

上野公園内國商品陳列館内

芝公園東京勸工會社内

芝愛宕下第二壬辰館内

熊谷出品店

熊谷出品店

熊谷出品店

右三所出品店ニ於テ袋物并ニ手提類其外附屬
 品トモ精々良品ヲ撰ヒ廉價ニ販賣仕候

製造卸商

本店 熊谷卵八

東京日本橋區藥研堀町

六廿百話電 屋目廣 町疊橋京 扱取手一告廣内場劇



○賣捌所は全國到處和洋酒店並洋物屋等に有之申候

大阪府下島下郡吹田村

大阪麥酒會社

抑アサヒビールは數年前より東洋唯一の麥酒製造所ならしめんと獨逸國に派
 遣し秘法を研究せしめ其計畫になりたるを期し専門の學士技師を精撰し最新
 製造器械を以て最上運に到りて其味の清冽醇良なるは衛生上し消化を補助
 船來麥酒を凌駕するに足る是實に當業専門家の賞賛歎美する處願くば江湖の旺

各位何卒御試用の上御高評の程偏に奉
 希望候敬白

便利 経済 ナカマヤン

●便利経済しらない人に、早くお厨爐を買せたい
 ●オカマサン、オカマサン、御徳用のオカマサン、▲堅い煉瓦に石造り、意気なつくりのヘツツイも氣丈に構へる
 ●煙筒も、表面の飾はよいけれど、御徳用のオカマサン、▲天地の眞理がわからぬ、此處らで自由の厨爐を買へ
 ●オカマサン、薪をばサラリと打捨て、御徳用のオカマサン、▲不景氣を今日に、目前の小利に迷はずに、昔造りのヘツ
 ツイと、薪をばサラリと打捨て、僅少の錢金おしますに、鐵の金輪に鐵をしろ、銅鑄や陶器の自由がま、眞理に
 適ふた器物、内にはお米をま、に焚き、総菜焼煮の支度より、ユムレツ、カツレツ、自由なり、同業商賣見かへら
 ず、あまり非常の機能シヤ、但し遠利のある物か、未だ使用て見ぬ人よ、阿諛と恐れ、自由なり、同業商賣見かへら
 ●オカマサン、オカマサン、御徳用のオカマサン、▲亭主の職業は知らぬ、阿諛と恐れ、自由なり、同業商賣見かへら
 終に勘定して、日本産は不好と、無暗に西洋を偏贊し、コーク、ストーブ、買込で、腹にも馴ない器械をば、内々
 使用ふは可笑子
 ●オカマサン、オカマサン、御徳用のオカマサン、▲ま、よ、成なり自由の厨爐は、國の益だと知せたい▲前面なし進
 歩の當世風は、舊風の反動遠ひはない、五年前うら賣弘め、舶來産も押つよし、買う時や少く高けれど、經濟向
 まは第一等、夏季や熱くてたまらない、其時やお鍋が氣をさかせ、狐鼠り抱いて片隅へ、から線細工でおてくるよ、
 小さな聲をも出さずに、内證ダヨ、かまやの發明が御免なサイ
 ●オカマサン、オカマサン、御徳用のオカマサン、▲お妾、嬢さん、若夫婦、世帯を持たなら厨爐か宜い、昔造の竈な
 ら、意氣な作りのお御座敷や、徳用一のオカマサン、▲花の顔貌振り袖も、大事の玉箱も、煤蒸り變るは必定ダ、お
 爲にならぬお止なサイ、發明の開けた今日に、些少の事情は打捨て、經濟大事に守りなサイ、まゝになるのを
 れ好なら改良竈を買はさんせ、目の玉ひくがお好なら、薪焚く竈を買ふがよい
 ●オカマサン、オカマサン、御徳用のオカマサン、▲昔の築造もよろしいが、當世の厨爐が立派ダネ、甲乙も
 炊焚をずる器物、薪焼竈の煙るに懲々で、改良竈は炭焚ダ、親父さん止ては好まないよ、本途の改良に違ひはない、オ
 ヤ徳用ダヨ
 ●オカマサン、オカマサン、御徳用のオカマサン、▲ストーブ使用て開化より、パン喰ふばかりが開化でない、
 自由の竈を買て来て、國益ますのが急務ダヨ、智識と智識の競べ合、キヨロく致しチャ居られぬ、究理と發明
 の魁首で、異國に劣らずヤツ付口、製造厨爐
 ●オカマサン、オカマサン、便利と經濟お徳用のオカマサン

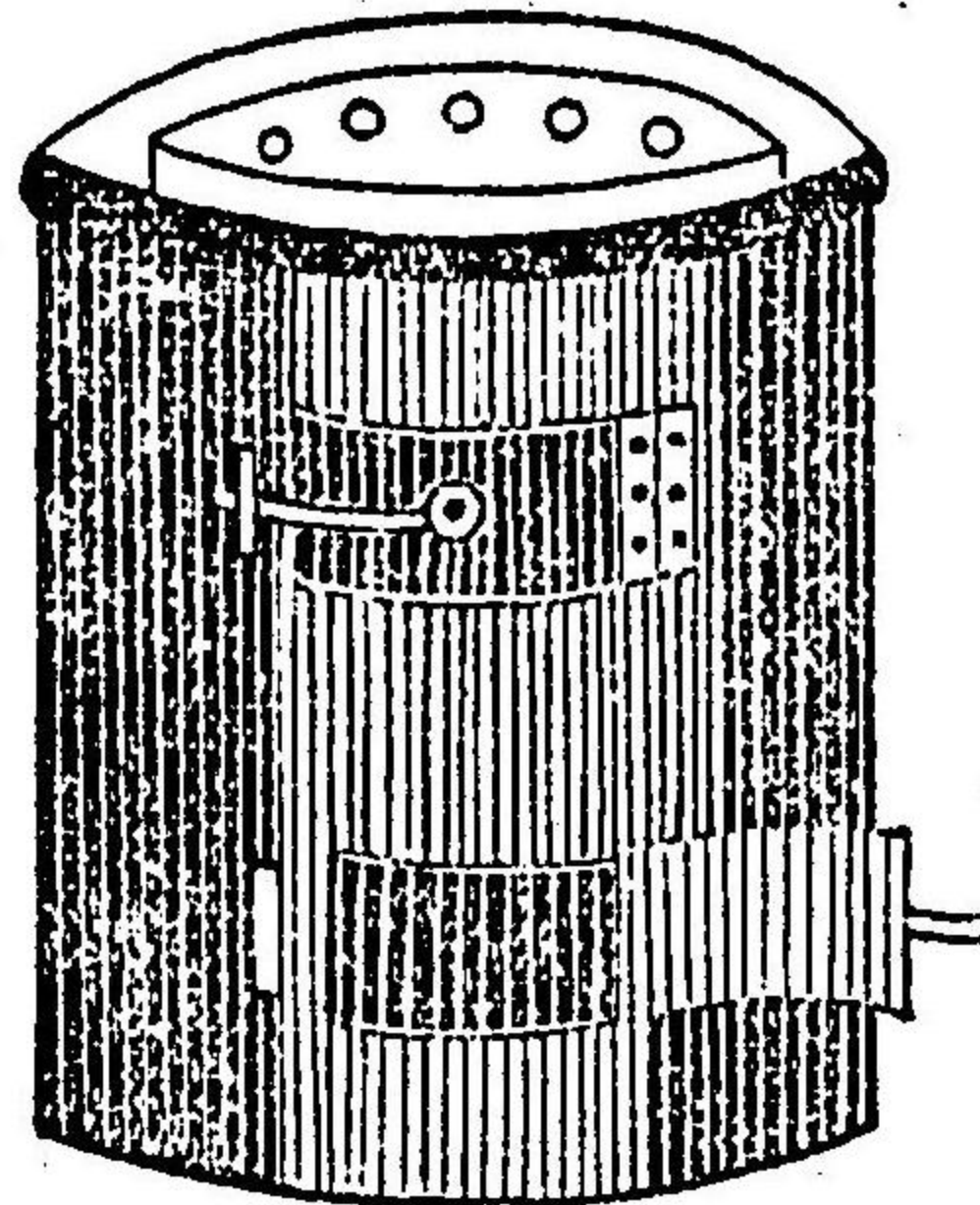
やき直し作者 かまや親父

鐵製厨爐之部附品類

壹升器	金貳圓五拾貳錢
貳升器	金參圓拾貳錢五厘
參升器	金參圓六拾壹錢五厘
四升器	金四圓貳拾八錢
五升器	金五圓拾五錢五厘
六升器	金五圓九拾壹錢五厘



蓋の圖



蓋



銅製重口之部附品類

壹升器	金六圓八拾貳錢
貳升器	金八圓五拾七錢五厘
參升器	金拾圓六拾壹錢五厘
四升器	金拾貳圓六拾八錢
五升器	金拾五圓七拾五錢五厘
六升器	金拾八圓參拾壹錢五厘

厨爐御使用ノ御方ハ破損ノ箇所出來候キハ早々弊店ニ御通知被下度存リ品貸渡シ無差支シテ修繕調進仕候也
 東京市日本橋區新材木町十五番地先東高川岸廿三號共同物揚場角
 紀伊國屋 竹内倉吉

專賣特許 日本親玉厨爐賣弘メ元祖

新酒荷着 發賣廣告

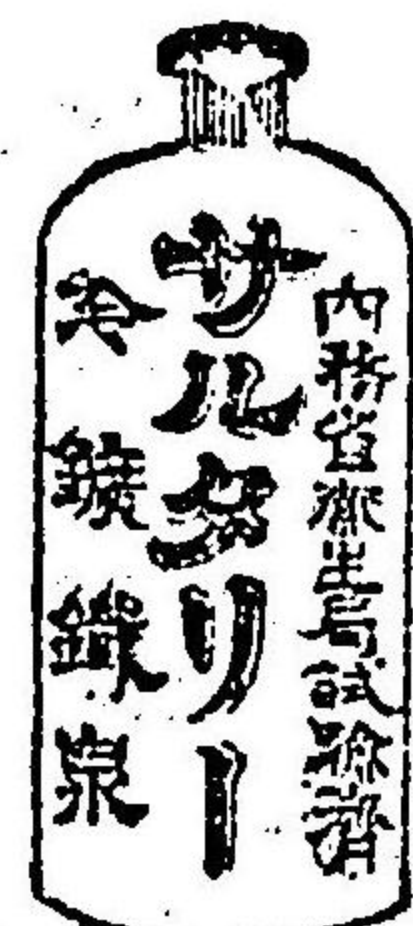
天の美酒 皇國清酒



一 手 販 賣
東 京 市 京 橋 區 南 新 川
高 橋 門 兵 衛

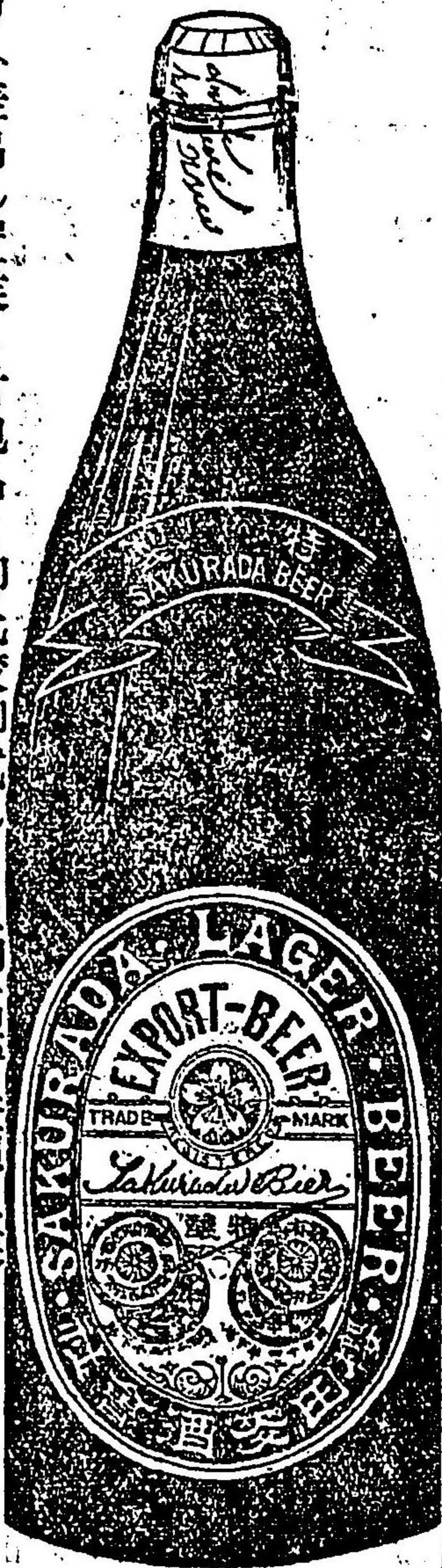
小生横濱より立戻り更に寫眞場新築其他藥品等に至るまで改良し舊來の如く本名を擧げて開業候に付陸續御來車あらん事を
銀座或丁目 寫眞師 一二見朝隈

大動位貞愛親王殿下より褒状を賜はり世界無比の滋養補血は勿論諸症に奇効有の證明を得たる
効 貧血症、胃弱、脚氣、皮膚病、月經不順、肺病、淋病、肥満、減乏、能 老衰、梅毒、疔瘡、腸加答兒、等其皮膚病一切に外用として奇効有り
東京京橋區本材木町三丁目十四番地
本 舖 田中利右衛門
服用分 二日 容量分金十二錢 浴湯 四升入一樽 金一圓五十錢
四日 容量分金廿二錢 用分 八升入一樽 金一圓八十錢
定 價 一週間容量分金卅五錢 定價 金二圓八十錢
其他取次は府下及全國至る所の賣藥店及洋酒店に有之候



改良特釀

櫻田麥酒



右精良の品諸方へ差出し置候し付他品と御比較御試しの上御高評奉願上候

東京麹町區紀尾井町

櫻田麥酒會社謹告

賞 與 金
壹 萬 六 千 六 百 法
金 賞 牌
QUINA-LAROCHE
幾 那 羅 西 尼

專 賣 所
日 本 一 手 販 賣 所

●附言特約御望の方は御申込有之度候

●品質幾那ラロシユ
大家ラロシユ氏の秘法に依り「キヤンキナ」なるもの、皮より有効なる元質を探りポードワイン中に化合したるものなり而して彼の普通の幾那酬の如き苦味は少しも含有せざれば小兒婦女にも飲用し易くして其効驗の著しきこと未だ曾て日本帝國に其比を見ざる處にして古今無比の藥用酒たることは醫學博士學士の深く信じて疑はざる所なり速かに飲用して本商會が社會を欺かざるを知り賜へ

●効能幾那ラロシユ
は佛國パリ藥劑學校及有名なる各病院醫學博士の証明に依りて明なり効能の最も重なる者を擧ぐれば第一腹を空らし氣力を強くし熱を治するに在り故に胃弱消化器病神經病疲勞鬱悶病處女病其他衰弱諸病重症の快復期に用ゐて著るしき効驗あり又鐵劑を調和したる物は血動力を増し小兒の生長を助け病後快復を速にし且つ産後の婦人用ゐて妙神の如し殊に此酒の特色は第一効能の顯著なると第二飲用し易さと第三後害を遺さざる是なり

●飲用法幾那ラロシユ
一瓶毎に飲用のコップを添杯普通熱病及び瘧等には一日に三杯乃至五杯胃病其他の病症には朝夕食事前亦は食後に一杯宛常用するときは其効殊に大なり

●定價
鐵劑を調和したる物大小共前全價
大一瓶 金一圓五十錢 小一瓶 金九十錢

佛國巴里府ドルヲ通廿二番
橫濱居留地海岸仲通卅一番
同 尾上町一丁目十番地

新 井 商 會
メ 井 商 會
バ イ リ 商 會
グ ロ 商 會

○貴嬢紳士需の香料廣告

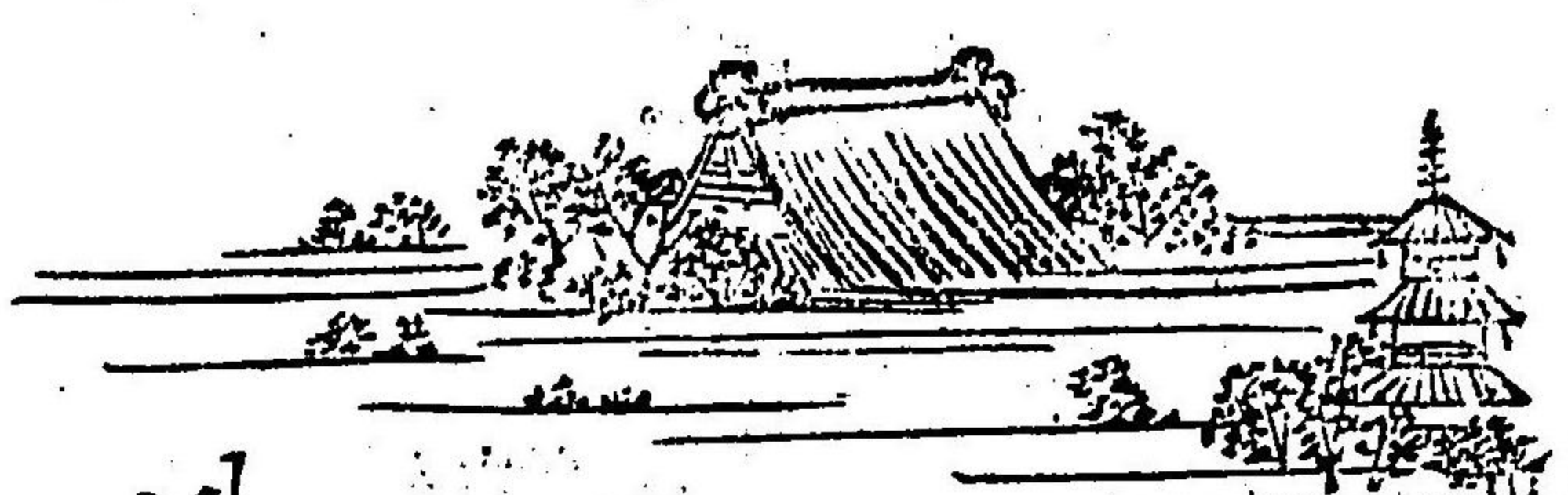


○人造麝香は佛國理學士が化學の作用を以て製造せし
一大新發明品なり○人造麝香は從來の麝香に比し數
倍久敷保つのみならず實に非凡の香氣を有す
○人造麝香は純白滑淨の粉末なるを以て衣類等へ擦り
込みおけば一種云ふべからざる幽香を放ち大に神身
の清浩を覺えしむ但し色つさ又は汚穢するの患ひな
し歐米各國の貴婦人紳士社會に於て隆んにこれを賞
用せり

○人造麝香は瓶入にして其上木筒に入れ携帶保存に尤
も安全なる裝飾となせり○近來類似の品數多有之に
依り御求の際は「星野」の名義に篤と御認を乞ふ
東京市日本橋區伊勢町藥種問屋

日本特約發賣元 △星野與兵衛

○市内各藥店并に全國有名なる藥店にて賣捌き候
取次御望の方は御申越あれ



上等
大
海子
第六區
了
杉本堂



腐敗風味ノ愛ナシ

世界第一等滋養品

店商田森 地番七町治銀田神京東 舖本
(番二十八話電)

店支田森 町耶太久南筋橋齊心販大 店支

東京	大阪	京都	神戶	名古屋	仙台	札幌	旭川	釧路	帯広	青森	岩手	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	伊豆	静岡	愛知	岐阜	富山	石川	福井	滋賀	京都	大阪	兵庫	徳島	香川	高松	愛媛	高知	福岡	佐賀	熊本	鹿児島	沖縄
東京	大阪	京都	神戶	名古屋	仙台	札幌	旭川	釧路	帯広	青森	岩手	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	伊豆	静岡	愛知	岐阜	富山	石川	福井	滋賀	京都	大阪	兵庫	徳島	香川	高松	愛媛	高知	福岡	佐賀	熊本	鹿児島	沖縄



古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入

古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入

古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入

古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入 古にしき繪紙又江戸買入

吉澤商舖

取次

夫れ齒は人生榮養上の最も大切なる者に之を保全するには齒磨の効多しとす然れども能撰せずして狼に用ゆべきに非らず方今幾多の齒磨中に隠然首領と仰れたる我が此の大博士(みかど)は醫學的の發明にして専ら純良の藥品を以て精製せし天下無二の齒磨なり人常之を用ゆれば衛生上最も有益にして七ツの徳あり

●其一齒を白くし磨滅の害なし ●其一齒は去り齒の根を堅くす ●其一ひし齒口ねつを思ひを除く ●其一口中を清くし食物の味を能くす ●其一口中の悪臭を去り齒くさを治す ●其一咽喉に入りて害なく胃腸を健にす ●其一舌唇のあれる患ひなし

●四方の貴客御試用の上大博士(みかど)の有効無比なるを御吹聴の程偏に奉希望候

大博士特約大販賣 東京橋本町三丁目 佐々木玄兵衛 大博士特約大販賣 四谷馬場一丁目 永田義原

各府縣下至る處の藥舖及賣藥店小間物店等に於て取次販賣致候間大博士と松本製とに御注意御求め被下度候尙取次販賣御望の諸君は本舖又ハ特約店へ御照會を乞



兩國廣小路五藏園本舖 大木口 哲

村松町壯眼水本舖 岩浪長藏

銀坐三丁目萬金丹本舖 松澤八右衛門

日本橋上横町萬金齋本舖 安川榮次郎

瀬戸物町玉の艶本舖 玉置金八

本石町二丁目十全堂 森谷萬次郎

元大坂町清婦湯本舖 高木與兵衛

下谷池の端寶丹本舖 守田治兵衛

小網町四氣轉丸本舖 黒澤利兵衛

馬喰町一丁目小町水本舖 平尾贊平

銀坐二丁目精鑄水本舖 岸田吟香

濱町一丁目麿香液本舖 木原長生堂

市中大販賣所

六廿百話電 屋目廣 町疊橋京 扱取手一告廣内場劇

●中將湯
 一日分金 七拾錢
 一週分金 貳拾五錢
 機能
 子宮病血の道○産前産後の諸症○月經不調○白帶下○赤帶下○逆上○氣鬱症○
 惡阻○眩暈○頭痛○水腫○痢症○疝瘕○感冒等に効能著し



産科婦人科専門
 醫學博士諸大医之證明

我が子宮病血の道くすり(中將湯)の有効確實なる事ハ三府の有名なる産科婦人科専門醫學博士諸大医の實驗證明せらるゝ所なれば御疑なく御用ひあらんことを乞ふ

東京市橋本區通四丁目七番地津村順天堂
 東京市橋本區通四丁目七番地津村順天堂

六廿百話電 屋目廣 町疊橋京 扱取手一告廣内場劇



商 玉



金銀側時計及
 掛置時計類○
 ダイヤモンド
 及諸寶石入指
 輪替帶留釦類

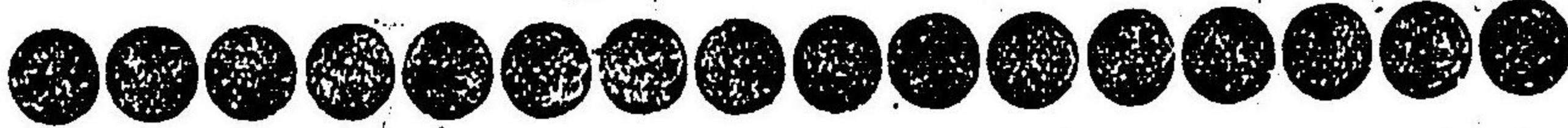
店 屋

貴顯紳士御婦人用金製寶石入諸細工○琴
 歌葉歌唱歌新曲「ナルコール」大小各種○
 兩眼鏡望遠鏡及金銀縁掛目鏡顯微鏡類○
 内外國美術室内裝飾置物類○米國製電氣
 作用自動掛時計及電氣器類○空氣作用室
 内輕便呼鐘○海陸軍鑛山土木氣象用測量
 用諸器械各種○各國尺度及晴雨計寒暖計
 各種○製圖用諸器械及附屬品一切用紙類
 共
 右之品々精良なるを相撰み廉價を以て販
 賣仕候間多少に拘はらず御用向被仰付度
 奉願上候謹言

東京市銀座三丁目

宮田藤左衛門

(電話三百〇五番)



滋養
第一



宮内省御用
地球石鹼

有栖川宮殿下御用
伏見宮殿下御用
小松宮殿下御用
北白川宮殿下御用
閑院宮殿下御用

此石鹼は宮内省及び各宮殿下御用恩命を蒙むれり
販賣店は府下及各所并に各地方至る處にあり

關東發賣元

養老組商會

製 大坂 大坂
造 西關 西關
元 發賣 發賣
所 東區 東區
村 寺野 寺野
敷 屋敷 屋敷
元 東區 東區
店 東區 東區